

2017年度 人間環境学部 国際バカロレア利用自己推薦入試 小論文 問題用紙

(60分)

【問題1】以下の文章1および文章2を読み、CSR (Corporate Social Responsibility) とCSV (Creating Shared Value) の違いに留意しながら、CSVが企業や社会に与える影響について、あなたの考えを述べなさい。

《文章1》

まず、三つの企業の取り組みをご紹介します。

キリンは「復興応援 キリン絆プロジェクト」の一つとして、福島産の梨と桃を使った缶チューハイ「氷結」を、限定販売している。ネスレ日本は、神戸市とともに「介護予防カフェ」を約60カ所で開催している。集会所にコーヒーマシンを提供し、高齢者が集会所まで歩く、会話する機会をつくっている。伊藤園は、「お〜いお茶」の茶葉を得るために、耕作放棄地を茶畑に造成。茶葉の全量買い取り契約を、農家と結んでいる。

これらはまったく別の事業だが、共通点がある。自社の生産、営業活動が社会的な課題の解決につながっている。

キリンは、旬の原料を確保して、「放射能汚染」という風評被害に悩む農家への信頼を高めようとしている。ネスレのケースでは、介護予防への支援が、「ネスカフェ」を継続的に購入してもらう機会になっている。伊藤園は、農業の振興と安定的な原料確保が両立している。

多くの企業が取り組んでいる社会的責任 (CSR=Corporate Social Responsibility) とは趣が異なる。どう違うのだろう。CSRは、寄付や社員のボランティアに頼ることが多い。テーマも環境保全や被災地支援が多く、企業のイメージ戦略に近い。財務、人的な余裕があってこそその活動と言える。

一方、この3社のような活動は、企業と社会の共通価値の創出 (CSV=Creating Shared Value) と呼ばれることが多い。米ハーバード大のマイケル・ポーター教授が2006年に提唱した考え方だ。

この考えが注目されたのは、2008年のリーマン・ショックの反省からという。CSVは、短期的な利益を重視する企業経営ではない。社会のニーズに応え、長期的な視点から利益を生む活動を続けるべきだ、という考えに通じる。

「また横文字、欧米の受け売りか」という受け止め方もあるかもしれない。でも考えてみると日本では「企業は公器。もうけのためだけにあるのではない。社員も給料のためだけに働いているのではない」という価値観が根強い。

近江商人には、売り手、買い手、世間のためになる商いを「三方よし」と呼ぶ言葉がある。京セラ名誉会長の稲盛和夫さんは「人のため、世のために役立つことをなすことが、人間として最高の行為である」と話すが、こうした考えに賛同する経営者も多い。一橋大学大学院の名和高司教授 (国際企業戦略) は「日本は課題先進国と言われる。企業の視点から、この国の社会的課題の解決策を見れば、それはイノベーションにつながる」と指摘する。

目の前にある製品、商品の改良も必要だろう。でも、それだけに追われては、社会や市民生活を変えるようなイノベーションは難しい。

(出典：A17-0199 朝日新聞「波聞風問」2016年4月5日朝刊、7頁、一部改変)

《文章2》

本州のほぼ真ん中に位置し、南北に天竜川が流れる長野県飯田市で、エネルギーの自立をめざす新しい実験が始まった。吹き抜ける風やふりそそぐ太陽光、川の流れから得られる再生可能な自然エネルギーは誰のものか、を問いかける試みである。

再生可能エネルギーはそこに住む人々の共有財産で、それを主体的に活用する権利も、また、そこに住む人々にある――。4月1日に施行された新しい条例は、こんな新しい考えを「地域環境権」という新しい言葉に込めた。

飯田市の牧野光朗市長は「再生可能エネルギーの活用は、地域住民との協働事業で進めたい。市としても全面的に支援していく」と話す。

なぜ「協働事業」にこだわるのか。

固定価格で電力会社に自然エネルギーの買い取りを義務づける制度 (FIT) が昨年始まったのをきっかけに、全国各地で太陽光パネルの設置が広がった。休耕田などの遊休地を活用する動きもある。牧野市長はこんな動きをみて、疑問を持ったという。FITで確実に収益を上げられるとみた、東京の大手企業の参入が目立ったからだ。

確かに、遊休地から地代は入るが、発電事業の収益の多くは地域を素通りして、都市に持っていかれる。地域の自然から得られるエネルギーなのに、いいとこ取りされるのではないか。活用するなら地域との協働事業にしてほしい。そんな思いを実現するために、前提となる「地域環境権」を条例に明記した。

企業が再生可能エネルギーの利用で稼ごうと考え、発電事業に取り組むのは自由だ。そのうえで、地域から得られる価値を地域と共有する仕組みをつくれれば、地域から信頼され、持続的に成長できる。米の経営学者マイケル・ポーターが近年提唱する、社会問題の解決と利益の双方をめざす「共通価値の創造 (CSV)」が、結局は企業の持続的な成長をもたらすという考え方にも一脈通じる。条例施行を受けて、飯田市東南部の上村地区で発電能力200キロワットの小水力発電所計画が進んでいる。200世帯ほどの小集落で、エネルギーの自立を目指すという。

地元企業や金融機関から約2億円超の投融資を受け、毎年1千万円の利益を上げる計画だ。利益は、地域を走るバスの増便や地域への医者への派遣事業などに使う。再生可能エネルギーから得られる利益を地域のために還元する。

東京電力福島原発事故を機に、再生可能エネルギーへの関心は高まった。コストや発電量など越えるべきハードルは、確かに残っている。大きな川のはじまりも、山間の小さな泉のわき水から。小さな集落で始まった挑戦が大きく育つことを願う。

(出典：A17-0199 朝日新聞「波聞風問」2013年4月7日朝刊、5頁、一部改変)

2017年度 人間環境学部 国際バカロレア利用自己推薦入試
小論文 問題用紙

(60分)

【問題2】次の文章を読んで、それぞれの文章の下の問1及び問2に答えなさい。

2015年1月、ダボス会議で知られる世界経済フォーラムは「潜在的な影響が最も大きいと懸念されるグローバルリスクは水危機である」と発表した（「グローバルリスク報告書2015年版」）。これは、28のグローバルリスクの中から900人の専門家が選んだ結果である。2016年版でも、今後10年間で懸念されるグローバルリスクの第一位が水危機であり、影響度で評価された2016年のグローバルリスクでも気候変動の緩和策や適応策の失敗、大量破壊兵器について第三位に位置づけられている。

この報告書でいう水危機とは、「人間健康や経済活動への有害な影響をもたらす、水の量的あるいは質的な利用可能性の重大な減少」を指す。具体的には以下の点が指摘されている。

- (1) 人口増加の二倍の速度で水利用が増大していて、2025年までに世界人口の三分の二が水ストレスに曝されると想定されている。
- (2) 世界人口の9人に1人が改善された水源に飲み水を求めることができず、3人に1人が改善されたトイレを利用できない結果、毎年約350万人が命を落としている。
- (3) 2000～2006年の間の早魃、洪水、高潮によって、30万人にも上る人々が亡くなり、4,220億ドル（約50兆円）相当の被害もたらされている。

ここで、気候変動よりも水危機の方が潜在的な影響が大きいというのは意外に思えるかもしれない。実は2014年の報告書までは、気候変動自体がグローバルリスクとされていた。それに対し、2015年の報告書では、気候変動や異常気象は所与とされ、それがさらに進展した結果、より身近に感じられる深刻なグローバルリスクの象徴として水危機が注目され、取り沙汰されるようになってきているのである。

問1 水は運搬するのに不経済なため、ほとんどがその土地で調達されるものと考えれば、ローカルな問題とすることができる。にも関わらず、なぜグローバルな問題として認識されているのか、具体的な事象を想定しながら、あなたの考えを述べなさい。

地下水の枯渇、先細る川、干上がる湖の様子を知ると、地球の水資源が枯渇する、といった煽り文句も本当のような気がしてくる。しかし、地球表層の水は形を変えて循環しているだけで、数万年から数十万年といった時間スケールではその総量は変化しないと考えてよい。大気圏上端から宇宙空間に水素が逸散しているのも、その分の水が減りつつあるという推計がある一方で、地球のマントルやコア（中心核）には海の数倍の水が蓄えられているのではないかと、という説もあり、地球にはわれわれが想像する以上に大量の水があると推測されている。

もちろん、地球の中心部にどれだけ水が含まれていようとも、人間が容易に利用できないのであればわれわれにとってはないのと同じである。そういう意味では、地球表層の水の大半を占める海水や氷河・氷床、あるいは深い地下水なども簡単には利用できないので、やはり淡水資源は貴重であるという説明にも説得力はある。

しかし水は基本的には循環資源であり、使っても物質としてなくなるわけではない。非持続型の地下水資源である化石水ですら、その地下水に依存している人々にとっては枯渇するように思えても、地球全体からするとどこかに消えて無くなるわけではない。むしろ、それまで地中に蓄えられて循環していなかった水が地球表層の水循環に加わるので、その分海水面を押し上げている、という研究があるくらいである。1960年代以降、灌漑農業の拡大と地下水を汲み上げる電動ポンプの普及によって、そうした非循環型地下水が汲み上げられ、累積で約1～5センチメートル程度海水面を上昇させたのではないかと推計されている。

問2 水はこのように地球上にふんだんに存在し、循環によって使っても決して無くなることはない。にも関わらず、なぜ水不足問題がしばしば大きな問題として認識されているのか、具体的な事象を想定しながら、あなたの考えを述べなさい。

（出典 沖大幹「水の未来—グローバルリスクと日本」岩波新書、一部改変）